赤穂市文化財調査報告書 46

# 周世・入相遺跡発掘調査報告書Ⅳ

## ―宅地開発事業に伴う発掘調査―

1998年3月
赤穂市教育委員会

赤穂市文化財調査報告書46

# 周世・入相遺跡発掘調査報告書Ⅳ

## ―宅地開発事業に伴う発掘調査―

1998年3月
赤穂市教育委員会

# 序　文

赤穂市を南流する千種川は、有史以来私たちの祖先にその豊かな水と自然の恵みを与え続け、今も県下一の清流として、ともすれば殺風景になりがちな市街地に涼やかな風情を醸し出してくれます。

周世・入相遺跡はこうした千種川流域にあり、発見以来、赤穂市でも有数の重要な遺跡として知られてきました。近年にもほ場整備事業や県道建設に伴う発掘調査によって、数々の貴重な成果をあげているところです。

今回ここにご報告いたしますのは、宅地開発に伴う発掘調査の成果で、調査自体は小面積なものでありましたが、周世・入相遺跡の一端を明らかにすることができました。ささやかな成果ではありますが、これまでの調査成果に加えて遺跡の実態解明の一助になるものと確信しております。

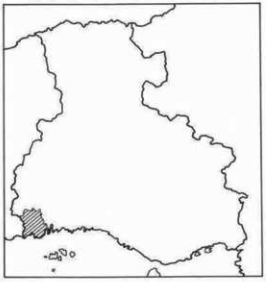
特に今回の発掘調査の実施にあたっては、地権者・施主の方に多大なご協力を賜りました。ここに深く感謝申しあげます。また、発掘調査・整理作業にご参加頂きました方々、現場付近の住民の皆様に心からお礼申しあげます。

平成１０年 3月

赤穂市教育委員会
教育長　平井 伸次

# 例　言

1. 本書は赤穂市教育委員会が民間の宅地開発事業に伴い、赤穂市周世に所在する周世・入相遺跡推定範囲内において実施した、埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査は赤穂市教育委員会が事業者の協力を得て実施したもので、その費用の一部は国庫補助金によった。なお発掘調査の現地での担当者は赤穂市教育委員会 中田宗伯である。
3. 調査の遺構図の作成は調査担当者と補助員が行った。また、現地での写真撮影については、調査担当者が撮影した。
4. 出土遺物の整理作業については、1993年度に(財)赤穂市文化振興財団に委託し、遺物の実測とトレースは篠宮欣子が担当した。
5. 本書の作成は赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係が実施し、報告書の執筆・編集・遺物写真の撮影は中田宗伯が担当した。
6. 本書で使用する方位はすべて磁北である。
7. 土層名については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1991年版を参考とした。
8. 発掘調査に係る出土遺物及び記録資料は赤穂市教育委員会が赤穂市埋蔵文化財発掘調査事務所において保管している。



赤穂市の位置

# 目　次

## 本文目次

序　文
例　言

第1章　調査の経緯 …… 1
1. 調査に至る経過 …… 1
2. 調査体制 …… 2

第2章　周世・入相遺跡をめぐる環境 …… 3
1. 周辺の遺跡 …… 3
2. 遺跡の概要 …… 5

第3章　調査の結果 …… 9
1. 調査の概要 …… 9
2. 検出遺構と出土遺物 …… 9

第4章　まとめ …… 15
1. 各遺構の時期 …… 15
2. 周世・入相遺跡と千種川下流域の弥生遺跡 …… 15

# 挿 図 目 次


第1図　調査地点(S=1：10,000) …… 1
第2図　千種川下流域の遺跡分布(S=1：25,000) …… 6
第3図　調査区遺構配置図(S=1：200)及び土層断面図(S=1：80) …… 8
第4図　調査区の位置(S=1：800) …… 9
第5図　土坑1(S=1：20)と出土遺物(S=1：4) …… 9
第6図　土坑2(S=1：20)と出土遺物(S=1：4) …… 10
第7図　溝1・2(S=1：80,1：40) …… 10
第8図　溝4(S=1：40)と出土遺物(S=1：4) …… 11
第9図　掘立柱建物1(S=1：50) …… 11
第10図　掘立柱建物2(S=1：50) …… 12
第11図　Aトレンチ(S=1：60) …… 12
第12図　遺構に伴わない遺物(S=1：4) …… 13
第13図　千種川下流域の主な弥生集落 …… 16


# 写真図版目次


写真図版1　遺跡周辺の地形（国土地理院撮影）
写真図版2　上　周世・入相遺跡の遠景　下　調査前の状況
写真図版3　上　調査区全景（南東から）　下　調査区全景（北西から）
写真図版4　上　土坑1（北から）　下　土坑2（西から）
写真図版5　上　溝1・2（南から）　下　溝4（西から）
写真図版6　上　掘立柱建物1・2
　　下　Aトレンチ（南から）　Bトレンチ（東から）
写真図版7　土坑1出土土器　土坑2出土土器
　　溝4出土土器　包含層出土土器
写真図版8　上　包含層出土土器　下　包含層出土土器


# 写真挿図目次


写真1　木津・段ノ上遺跡（弥生中期） …… 3
写真2　高雄・根木遺跡の掘立柱建物群 …… 4
写真3　発掘調査の様子 …… 14
写真4　発掘調査の様子（Aトレンチ） …… 14

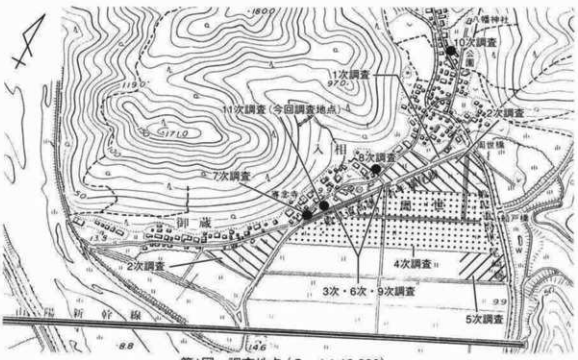

# 表 目 次


表1　周世・入相遺跡調査一覧 …… 1

# 第１章　調査の経緯

## 1．調査に至る経過

1991年4月頃、赤穂市教育委員会に赤穂市周世字宮田1466における宅地開発事業が示された。計画予定地は周世地区を走る県道周世-有年横尾線の北側にあたり、1986～1988年度に兵庫県教育委員会が県道建設工事に伴って実施した発掘調査によって多数の遺構・遺物が検出された地区であった。このため赤穂市教育委員会では宅地造成に先立ち発掘調査が必要であると判断し、事業者の協力を得て宅地造成予定地内の発掘調査を行った。なお調査は国庫補助事業として実施した。実際の現地での発掘調査は1991年5月21日に開始し、検出遺構の測量作業や埋め戻し作業などがすべて終了した6月12日に現場を撤収した。




第1図　調査地点（S＝1：10,000）

| 発掘調査 | 調査年度 | 調査主体 | 調査の種類 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|
| | 1982・1983年度 | 赤穂市教育委員会 | 分布調査 | |
| 1次調査 | 1983年度 | 赤穂市教育委員会 | 確認調査 | 県道 |
| 2次調査 | 1985年度 | 赤穂市教育委員会 | 確認調査 | ほ場整備 |
| 3次調査 | 1986年度 | 兵庫県教育委員会 | 全面調査 | 県道 |
| 4次調査 | 1986年度 | 赤穂市教育委員会 | 確認・全面調査 | ほ場整備 |
| 5次調査 | 1986年度 | 赤穂市教育委員会 | 確認調査 | ほ場整備 |
| 6次調査 | 1987年度 | 兵庫県教育委員会 | 確認・全面調査 | 県道 |
| 7次調査 | 1987年度 | 赤穂市教育委員会 | 全面調査 | 宅地開発 |
| 8次調査 | 1988年度 | 赤穂市教育委員会 | 確認調査 | 宅地開発 |
| 9次調査 | 1988年度 | 兵庫県教育委員会 | 全面調査 | 県道 |
| 10次調査 | 1990年度 | 赤穂市教育委員会 | 確認調査 | 宅地開発 |
| 11次調査 | 1991年度 | 赤穂市教育委員会 | 全面調査 | 宅地開発 |

表１　周世・入相遺跡調査一覧

## 2. 調査体制

発掘調査及び整理作業は赤穂市教育委員会が主体となり実施した。なお、1993年度の整理調査については、(財) 赤穂市文化振興財団に委託している。本書の作成は1997年度に実施した。各年度の体制は以下のとおりである。

【発掘調査】
1991（平成3）年度
赤穂市教育委員会

| | |
|---|---|
| 教育長 | 木山正規 |
| 教育次長 | 小島和夫 |
| 生涯学習課長 | 藤原正昭 |
| 文化財係長 | 宮崎素一 |
| 事務担当 | 片山保子 |
| 調査担当 | 藤田忠彦 |
| | 中田宗伯 |

【整理調査】
1993（平成5）年度
赤穂市教育委員会

| | |
|---|---|
| 教育長 | 平井伸次 |
| 教育次長 | 小島和夫 |
| 生涯学習課長 | 西田晴紀 |
| 文化財係長 | 宮崎素一 |
| 事務担当 | 番匠則子 |
| 調査担当 | 藤田忠彦 |
| | 中田宗伯 |

赤穂市文化振興財団

| | |
|---|---|
| 学芸員 | 篠宮欣子 |

【報告書作成】
1997（平成9）年度
赤穂市教育委員会

| | |
|---|---|
| 教育長 | 平井伸次 |
| 教育次長 | 前田政一 |
| 生涯学習課長 | 宮本哲夫 |
| 文化財係長 | 宮崎素一 |
| 主査 | 番匠則子 |
| 調査担当 | 藤田忠彦 |
| | 中田宗伯 |
| | 味呑英和 |

なお、現地での発掘調査及び出土遺物の整理作業の参加者は以下のとおりである。

【発掘調査】 上住和、小林弥一郎、杉本学、鈴木雅彦、寺本徳義、中島満寿夫、矢野栄喜、山本勝巳、吉田鐵良（地元有志）
赤松武、起塚力、福本啓次（(社) 赤穂市シルバー人材センター）

【整理作業】 谷山典子、田淵むつみ、中塚真弓、西川依子、山田とみか（地元有志）

# 第2章　周世・入相遺跡をめぐる環境

## 1. 周辺の遺跡

赤穂市は兵庫県の西南端に位置し、西は岡山県備前市及び和気郡日生町に接しており、播磨の西限にあたる地域であるばかりでなく、1963年に現在の福浦地区が岡山県和気郡から合併しているので、現在では旧国の備前の一部も含んでいることになる。

赤穂市の大部分は千種川の下流域にあたり、平地となる部分はこの千種川の本流や支流によって形成された流域平野と河口に発達した三角州、及び近世以降の干拓地から構成されている。ところが千種川流域においては、播磨の他の河川に比べて臨海平野部の陸地化が進行した時期が古代末～中世初頭以降と遅かった[1]ため、市内の中世以前に属する遺跡の分布は、主に市域北部にあたる有年盆地周辺に集中している。周世・入相遺跡が立地する有年地区以南の千種川下流域においても、流域平野は現氾濫原と完新世段丘面により占められている。しかもその面積の比率は、前者の比率が極めて高くなっており、完新世段丘面の分布はわずかに真殿地区・周世地区・根木地区・木津地区・高野地区などのように、その上流側に千種川の侵食を遮る山塊が突出していたり、谷が深く山塊に嵌入している部分に限定される。よって遺跡もこうした侵食を免れた完新世段丘面上において点々と確認されている。以下、周世・入相遺跡をめぐる千種川下流域の歴史的な環境について概観しておく。

千種川と長谷川の合流地点から下流域の地域において、現時点で確認されている最も古い遺跡の時期は弥生時代中期中葉で、それ以前に遡る遺構・遺物は知られていない。上流にあたる有年地区には馬路池遺跡[2]、東有年・沖田遺跡[3]、上菅生遺跡[4]、そして臨海山麓部には大津・堂山遺跡[5]、猪壷谷遺跡[6]などの縄文時代に属する遺跡が存在するので、千種川下流域にもこの時代の遺跡が存在した可能性はあるものの、千種川の侵食によりすでに失われたか、深く堆積土の下に埋没しているものと思われる。弥生時代においても、有年地区を含めて千種川流域では臨海部の大津・堂山遺跡出土のわずかな例を除いて前期に遡る遺跡は確認できず、それ自体重要な歴史的あるいは自然環境上の理由が存在したことを物語っている。ようやく弥生時代中期中葉になると、千種川下流域の各地に小規模ながら点々と集落が出現したことが遺跡分布から読みとれる。この時期の遺跡には周世・入相遺跡と木津・段ノ上遺跡[7]などが知られ、特に木津・段ノ上遺跡では近年の発掘調査において、竪穴住居数棟が検出されたのをはじめとして多数の遺構・遺物が知られている。

写真1　木津・段ノ上遺跡（弥生中期）

千種川下流域において弥生集落が広範に展開するのは、むしろ弥生時代後期になってからである。この時期には周世・入相遺跡、千種川を挟んで対岸の高雄・根木遺跡[8]、さらに下流の木津・段ノ上遺跡などで竪穴住居をはじめとして多数の遺構・遺物が検出されている。これらの遺跡では中期中葉に集落が形成されはじめ、後期に集落規模が拡大していることが特徴である。さらに周世・入相遺跡や高雄・根木遺跡では、

弥生時代後期の前半の良好な一括資料に恵まれており、なお類例の少ない当時期の土器編年作業に果たす役割が期待される。

また周世・入相遺跡から2.5km下流の東岸に上高野遺跡があり、扁平紐式銅鐸の凝灰岩製鋳型片が採集されている。この鋳型は、かつて河原で採集され小堂に祠られていたものを、松岡秀夫氏が銅鐸鋳型であると確認したものである。この上高野遺跡は、1996年度には場整備事業に伴って発掘調査が実施されたが、中世の遺構が検出されたのみで、弥生時代の遺構は依然として未発見である。このほか千種川下流域では南野中中洲、南野中西岸、赤穂大橋下、千鳥ヶ浜など河口付近の河川敷で弥生中期後葉から後期の土器が採集される地点がある。

古墳時代になると、その前半期の集落跡・古墳ともに千種川下流域では未確認である。一方古墳時代後期では周世水木原古墳、周世黒谷古墳、周世宮裏古墳群(27基)などが現在の周世集落の背後の山麓に展開しているほか、周世・入相遺跡においても1985年度に行われた場整備に伴う発掘調査では竪穴住居跡などの遺構が確認されている。また周辺の千種川流域でも、真殿門前古墳群(5基)、高取山古墳群など横穴式石室墳を中心とする多数の後期古墳が築造されている。これらの古墳群の築造母体となった集落跡は周世・入相遺跡を除いて未だ未発見であるが、それぞれ山麓の完新世段丘面上において今後検出される可能性が高いものと思われる。

奈良時代では高雄・根木遺跡において、掘立柱建物6棟のほか多数の土器が出土している。掘立柱建物はいずれも計画的に配置されており、うち2棟は総柱の構造を持っていることから倉庫と推測される。ところで『和名類聚抄』によると、律令期における赤穂郡の諸郷のひとつとして、周勢(世)郷が存在したことが記されており、現在の周世の地名はその遺称であることから判断すれば、この地区が周勢郷の一部であったことはほぼ疑いない。周世地区と千種川を挟んで対岸に位置する高雄・根木遺跡の建物群は、こうした周勢郷に関連した施設である可能性は高い。このほか奈良時代の遺跡として、木津・段ノ上遺跡から土器がまとまって出土しているが、明確な遺構は不明であった。また周世地区の南東にある山の山頂付近に船戸山遺跡があり、古墳時代から平安時代にかけての土器が散布している。千種川の河口付近に目を転ずれば下高谷遺跡が存在し、兵庫県教育委員会が実施した発掘調査では、11～12世紀頃の掘立柱建物等が検出されている。

写真2　高雄・根木遺跡の掘立柱建物群

中世になると、千種川下流域にも木津・段ノ上遺跡、木津・原遺跡などかなり大規模な集落が出現する。とりわけ木津・段ノ上遺跡では多数の掘立柱建物とともに青磁・白磁をはじめとする、多種多様な遺物が出土することから、通常の農業集落以外の性格を持つ集落として捉える必要があろう。これらの遺跡がある木津地区と千種川を挟んで対岸の高野地区には上高野遺跡があり、さらに背後にある標高258mの尼子山山頂には尼子山城という中世山城跡がある。尼子山城の年代を決定する確たる根拠はないが、尼子義久が築

域したと伝えられている。その当否はともかく、市内でも中世山城が集中する有年地区や坂越地区といった交通の要衝から離れてわざわざ単独で存在することから、木津・高野両地区が当時戦略上重要な位置にあったことを推測させる。周世集落背後の山上には鎌倉時代に遡る可能性がある高雄山神護寺跡[19]が所在するほか、布目瓦片が採集されている地点や「開き」という小字を残す猪垣がある。このほか周世・入相遺跡、真殿・門前遺跡[20]などで中世の遺構・遺物が知られている。

中世から近世にかけて、千種川が河口に三角州を発達させ、人間の活動領域を提供するようになると、千種川下流域の政治・経済の中心も臨海平野に移動することになる。経済的側面では発達したデルタが塩田の形成を容易にしたし、海上交通の中継地や河口港としてもその価値は重視されたと推測され、以降これに伴って地域支配の中枢が置かれるようになる。こうした千種川デルタ地帯の開発と発展を支えた重要な社会資本のひとつとして、旧上水道関連の遺構が千種川下流域に残されている。池田氏入封後に敷設された上水道は、上流の千種川から取水して導水路により城下へと導かれ各戸まで配水される本格的なものであった[21]。こうした上水道の取水口や導水路が各所に残されており、高雄・根木遺跡や木津・野垣内遺跡[22]においてその一部が発掘調査されている。

## 2. 遺跡の概要

前節で概観した自然環境・歴史的環境にある周世・入相遺跡の既往の調査成果について、以下簡単に概述しておく。

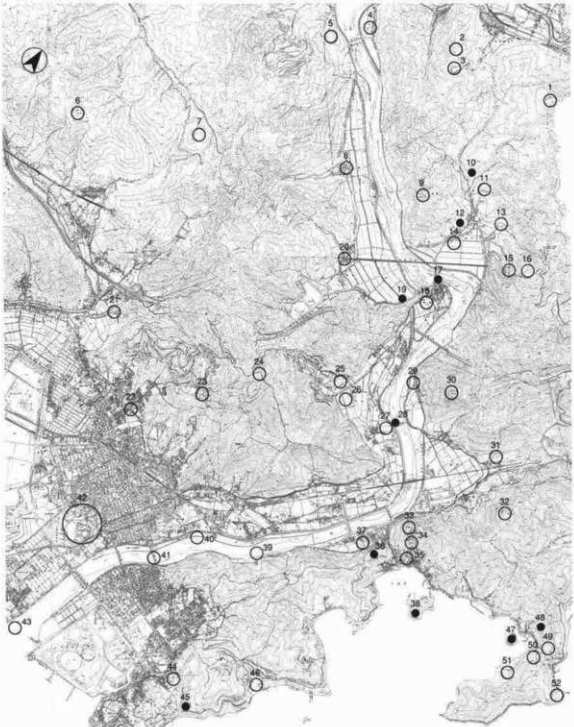
周世・入相遺跡の発見の経緯は、戦後この地で行われた瓦粘土採取の際に松本保氏によって遺物の出土が確認されたことによる。その出土遺物については『赤穂市史』『有年考古館蔵品図録』等の文献[23]に詳しい。その後、遺跡を含む周世地区のほ場整備事業が、加えて県道建設の事業が計画された。これらの開発行為を受けて赤穂市教育委員会では、昭和1982・1983年度に分布調査を実施し、広い範囲で遺物の散布を認めた。

ほ場整備事業については、1985・1986年度に発掘調査を行い、遺跡の性格や範囲を明らかにすることができた[24]。特にこれまで知られていなかった古墳時代の竪穴住居などの遺構を検出し、背後の山麓に展開する後期古墳群の築造母体を明らかにしたことの意義は大きい。県道建設に伴う調査は1983年度に赤穂市教育委員会が確認調査を、兵庫県教育委員会が1986年度に全面調査、1987年度には確認調査と全面調査を、1988年度に全面調査をそれぞれ行った。この県道関連の調査[25]では、弥生時代中期後半～後期前半、弥生時代後期後半、古墳時代～室町時代、江戸時代の4面の生活面が確認されている。特に弥生時代後期前半に属する一括出土の土器群は、当地域の土器編年研究に新たな視座を与えるものであり、岡山県南部地域との並行関係を検証できる数少ない資料である。また弥生時代後期後半の多角形住居などを含めて7棟の竪穴住居が検出されるなど、この遺跡においては弥生時代後期に活発な集落の営みのあったことが明らかとなった。

このほか赤穂市教育委員会では、周世・入相遺跡の推定範囲内やその周辺における民間の宅地開発事業に伴い、発掘調査や立ち会い調査を実施しており、本書で報告するのもこうした宅地開発に伴う調査成果の一部である。

注

(1) 高橋　学　a「周世入相遺跡の地形環境分析」『赤穂市周世入相遺跡』兵庫県教育委員会　1990年、b「播磨



1 高野須城跡
2 鎌ヶ堂城跡
3 医王山騎行寺跡
4 宮原遺跡
5 鍋子城跡
6 黒鉄山遺跡
7 坊主屋敷遺跡
8 真殿・林遺跡
9 高雄山神護寺跡
10 周世黒谷古墳
11 周世宮裏古墳群
12 周世水木原古墳
13 周世・鳥ノ山遺跡
14 周世・入相遺跡
15 船戸山古墳群
16 船戸山遺跡
17 高雄船渡取水井堰跡（上水道遺構）
18 高雄・榎木遺跡
19 切山隧道取水口跡（上水道遺構）
20 真殿・門前遺跡
21 大津・堂山遺跡
22 塩屋・柴田遺跡
23 大林古墳群
24 岩屋寺跡
25 木津・段ノ上遺跡
26 木津・原遺跡
27 木津・野垣内遺跡
28 木津取水井堰跡
29 上高野遺跡
30 尼子山城跡
31 高取山古墳群
32 高伏山古墳群
33 茶臼山城跡
34 宝珠山妙見寺跡
35 坂越浦城跡
36 八坂山経塚
37 下高谷遺跡
38 生島古墳
39 南野中中屏遺跡
40 南野中川岸遺跡
41 赤穂大橋下遺跡
42 赤穂城跡・赤穂城下町跡
43 千鳥ヶ浜散布地
44 尾崎・大塚遺跡
45 尾崎・大塚古墳
46 猪妻谷遺跡
47 鍋島古墳
48 みかんのへた山古墳
49 小島遺跡
50 小島古墳群
51 小島古墳群
52 妻標古墳群

第2図　千種川下流域の遺跡分布（S＝1：25,000）

灘沿岸平野の地形環境と土地開発」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会　1990年、c「千種川中流域の地形環境分析」『兵庫県赤穂市東有年・沖田遺跡発掘調査報告書」　赤穂市教育委員会　1997年

(2) 松岡秀夫　a「考古学から見た赤穂」「赤穂市史」　第一巻　赤穂市　1981年、b「赤穂市の考古遺跡と遺物」『赤穂市史」　第四巻　赤穂市　1984年、西播流域史研究会編『有年考古館蔵品図録』　財団法人有年考古館　1991年

(3) 藤田忠彦編『兵庫県赤穂市東有年・沖田遺跡発掘調査報告書」　赤穂市教育委員会　1997年

(4) 赤穂市教育委員会が1995年度には場整備に伴い事前調査を実施

(5) 注（2）文献及び、松岡秀夫ほか『赤穂市大津堂山遺跡試掘調査報告書」赤穂市教育委員会　1979年

(6) 注（2）文献

(7) 赤穂市教育委員会が1995・1996年度には場整備に伴い事前調査を実施

(8) 赤穂市教育委員会が1992年度には場整備及び公民館建設に伴い事前調査を実施

(9) 注（2）文献及び以下の文献
松岡秀夫「赤穂市上高野発見の銅鐸溶笵」『考古学研究』第23巻 第2号　考古学研究会　1976年
岩崎俊男「赤穂市上高野で発見された銅鐸の鋳型」「月刊文化財」156号　文化庁文化財保護部　1976年
櫛本誠一・松下勝『日本の古代遺跡』3兵庫南部　保育社　1984年

(10) 注（2）文献

(11) 注（2）文献

(12) 注（2）文献

(13) 赤穂市教育委員会が1995・1996年度には場整備に伴い事前調査を実施

(14) 注（2）文献

(15) 兵庫県教育委員会が1996年度に坂越郵便局建設に伴い事前調査を実施

(16) 赤穂市教育委員会が1994年度には場整備に伴い事前調査を実施

(17) 赤穂市教育委員会が1996年度には場整備に伴い事前調査を実施

(18) 注（2）文献

(19) 注（2）文献

(20) 赤穂市教育委員会が1987・1988年度には場整備に伴い事前調査を実施

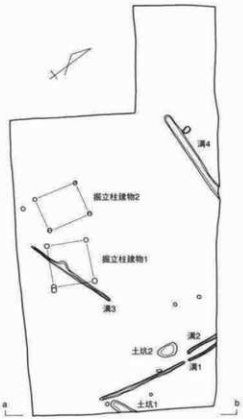
(21) 廣山堯道　a「播州赤穂の城と町」雄山閣　1982年、b「赤穂上水道の敷設」「赤穂市史」第二巻　赤穂市　1983年

(22) 赤穂市教育委員会が1993年度には場整備に伴い事前調査を実施

(23) 注（2）文献

(24) 宮崎素一ほか　a『周世入相遺跡発掘調査報告書」赤穂市教育委員会　1984年、b『周世入相遺跡確認調査報告書Ⅱ」赤穂市教育委員会　1986年、c『周世入相遺跡確認調査報告書Ⅲ」赤穂市教育委員会　1988年

(25) 甲斐昭光編『赤穂市周世入相遺跡」兵庫県教育委員会　1990年



1 現在の水田耕作土
2 黒褐色極細砂土（10Y 3/2）
3 にぶい黄色細砂土（2.5Y 6/4）
4 オリーブ褐色極細砂土（2.5Y 4/3）
5 灰オリーブ色極細砂土（7.5Y 4/2）
6 黒色細砂土（10YR 2/1）
7 暗褐色極細砂土（10YR 3/4）
8 にぶい赤褐色極細砂土（2.5YR 4/4）
9 オリーブ黒色極細砂土（5Y 2/2）
10 緑灰色シルト（5G 5/1）

0 2m

第3図　調査区遺構配置図（S＝1：200）及び土層断面図（S＝1：80）

# 第3章　調査の結果

## 1. 調査の概要

調査地は県道周世・有年横尾線の北側に接しており、調査前は田であった。調査は遺跡に影響を及ぼす可能性のある建物予定地302㎡について全面調査を実施し、他の部分についてはAトレンチ・Bトレンチと名付けた2箇所の調査区を設定して遺跡の範囲を把握することとした(第4図)。

第4図　調査区の位置（S＝1：800）

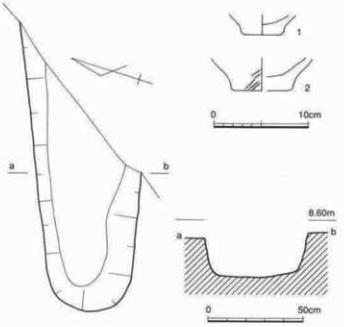
しかし緊急を要する個人の宅地開発事業という性格上、発掘調査に十分な期間を充当することが困難であったため、遺構検出は弥生時代の遺構が容易に識別できる緑灰色シルト質土上面まで機械によって掘削した後、人力によって遺構検出を行った。よって今回の調査の遺構及び遺構検出面は、兵庫県教育委員会が実施した県道部分の調査成果とは、調査位置が接しているものの、必ずしも整合しない部分があることをあらかじめ断っておく。

## 2. 検出遺構と出土遺物

### 土坑1（第5図）

調査区の東端付近で検出された土坑である。遺構の東半分が調査区外へ続くので、その規模については不明であるが、現状では幅約60㎝、深さは調査区外に向かって徐々に深くなっており、調査区内では最大35㎝を測る。

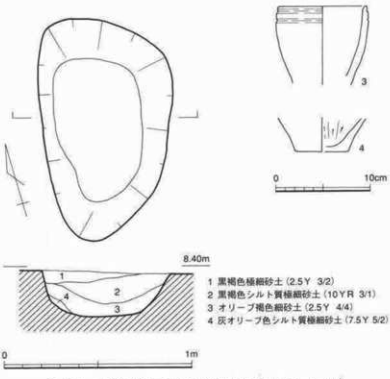
土坑の埋土中から弥生時代後期の壺・甕の破片が出土しているが、胴部の小片が多く、図化可能なものは底部のみである。1は甕底部であるが、内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。2は甕の底部で、内外面ともに摩滅が著しいものの外面にはわずかにタタキ目の痕跡が認められる。このほか壺・甕の胴部破片のなかには外面にタタキ目を残すものもあり、内面はいずれも粗いヘラケズリが観察できる。



第5図　土坑1（S＝1：20）と出土遺物（S＝1：4）

### 土坑2（第6図）

調査区の東部、溝1・2に近接して検出された土坑である。長さ120㎝、最大幅70㎝の不整形な楕円



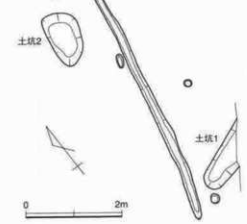

第6図　土坑2（S＝1：20）と出土遺物（S＝1：4）

形を呈する土坑で、検出面からの深さは約30cmを測る。その断面形は緩やかなU字形を呈し、埋土は4層のシルト質極細砂・シルトからなる。

土坑からは若干の弥生土器が出土した。3は口縁端部には2条の浅い凹線が認められ、直口壺の口縁部もしくはコップ状の形態をとる鉢と思われるが、どちらとも判断できない。全体に摩滅が激しく調整も観察不可能である。4は甕の底部であるが外面は器面の摩滅が著しいため調整痕は観察できないが、内面には縦方向のヘラケズリが認められる。

### 溝1・2（第7図）

調査区東端付近をほぼ南北方向に並行して走る2条の溝である。検出面では溝2は途中で途切れ、溝1も途切れながらやや長く南にのびる。両方の溝の間隔はおよそ60cm程度である。溝1・2ともに幅は15～20cm、深さは5cm前後と極めて浅く、その断面形は逆台形を呈する。




第7図　溝1・2（S＝1：80、1：40）

溝の埋土中から弥生土器の細片が出土したが図示は不可能である。

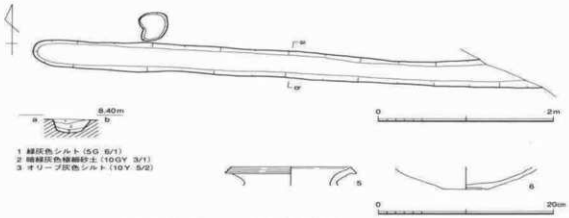
### 溝3（第3図）

調査区内を南西－北東方向に走る溝である。長さ5.6m、幅は一部で50cmほどに広がるもののそれ以外は10～20cmで、深さは5～10cm程度である。埋土中からの遺物の出土は皆無であった。

### 溝4（第8図）

ほぼ東西方向に走る溝で、東端は調査区外へのびるが、西端は調査区内で完結する。検出面での幅は40cm前後、深さは25cm前後を測り、断面形はU字型を呈する。埋土は概ね3層に分かれ、グライ化が認められる。

溝の埋土中からは弥生土器が出土している。5は甕の口縁部で13.8cmを測り、その端部を上下にわずかに拡張して端面を形成し、2条の凹線を施している。6は




第8図　溝4（S＝1：40）と出土遺物（S＝1：4）

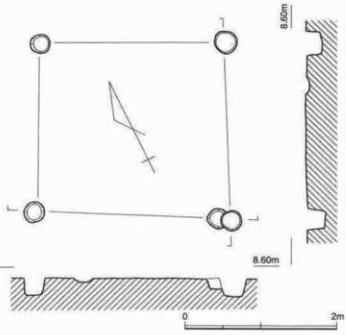
壺の底部と思われる破片で、底部外面は若干上げ底になっている。このほかにも甕の胴部破片が出土しているが、図化不可能である。

**掘立柱建物１（第９図）**

掘立柱建物2に隣接して検出した建物で、両者の主軸の方向・建物の間隔から判断すれば、2棟が同時に存在することは不可能である。掘立柱建物1の規模は1間×1間で、一辺が約2.4mとなる。柱穴は直径30㎝前後、深さは検出面から20～25㎝を測る。4つの柱穴ともに柱痕は検出されなかった。柱穴内から時期を示すような遺物は出土していない。

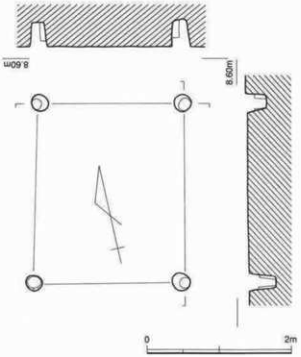
**掘立柱建物２（第１０図）**

規模は掘立柱建物1と同様に1間×1間であるが、東辺と西辺が北辺・南辺よりも若干長く2.5m×2.1mとなる。柱穴は直径が20～30㎝前後、深さは検出面から40㎝前後である。3つの柱穴において柱痕を確認しており、柱痕は直径15㎝前後である。掘立柱建物1と同様に柱穴内から遺物の出土はなかった。

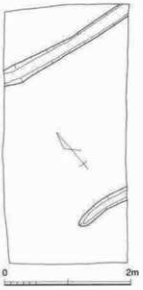



第9図　掘立柱建物1（S＝1：50）

全面発掘調査区域以外については遺構の広がりを把握するため、A・B2箇




第10図　掘立柱建物2（S＝1：50）




第11図 Aトレンチ（S＝1：60）

所のトレンチを設定して遺構・遺物の有無を確認することとした。

**Aトレンチ（第11図）**

Aトレンチは事業予定地内の北東隅付近に県道に接してトレンチを設定した。トレンチ内で溝2条を検出した。溝はいずれも幅20～25㎝で深さは5㎝前後と浅い。遺物はトレンチの掘削中に弥生土器の小片が出土したのみで、遺構からは出土しなかった。

**Bトレンチ**

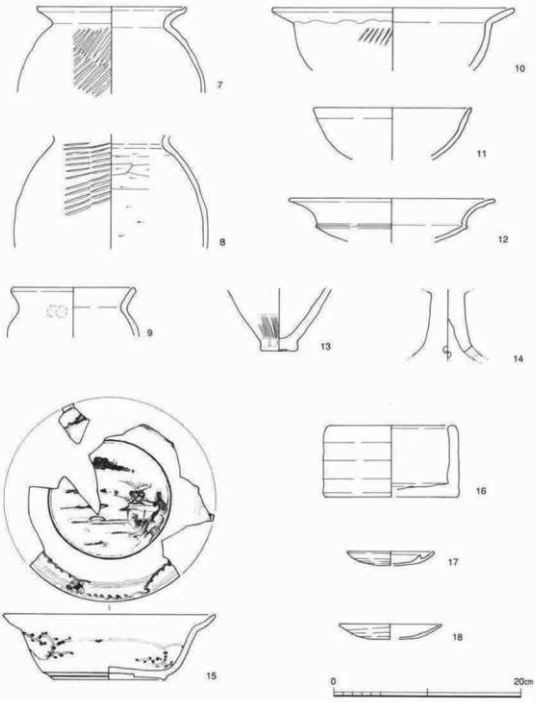
事業予定地の北隅部分に設定したトレンチである。トレンチの掘削中に若干の遺物は出土したが、遺構は確認できなかった。現在の表土下の比較的浅い部分からグライ化したシルト質土が厚く堆積しており、自然流路部分あるいは谷状地形等の低湿地部分にあたると思われる。

**その他の遺物（第12図）**

出土遺物は各遺構の項で記載したものの他に、機械掘削および遺構検出作業中に遺構から遊離して出土したものがある。以下、実測可能なものについて図示した。

弥生土器は後期に属するものが多い。7は甕の口縁部の破片で、口縁部は緩く外反させその端部をわずかに上方につまみ上げている。胴部外面にはタタキ目が顕著に残るが、内面は磨滅により観察できない。8は甕の胴部上半部であるが、口縁部は欠損している。胴部外面にはタタキ目を残し、その内面は頸部まで横方向のヘラケズリが施されている。9も甕の胴部から口縁部にかけての破片であるが、外傾する口縁端部は丸くおさめている。10と11は鉢であるが、11は脚部が付いて高坏となる可能性がある。10は大形で外面にはタタキ痕跡をわずかに残している。12は高坏の坏部であり、浅い体部から口縁部が大きく外反して立ち上がる。坏部と口縁部の屈曲部には沈線が1条施されている。14も高坏で、脚柱部である。13の底部は鉢と思われ、やや厚手で外面にはハケ目の痕跡を残す。

弥生土器以外では近世の陶磁器類がある。15は染付鉢で、破損したものを焼き継いで使用されている。底部外面は蛇ノ目凹形高台で、高台内は蛇の目状に釉ハギされ高台端部は露胎となっている。外面には蜻唐草文が描かれ、内面には見込部分に山水文・家文が、口縁部内面には波涛文がそれぞれ描かれ




第12図　遺構に伴わない遺物（S＝1：4）

ている。18世紀後半頃の年代が与えられる。16は備前焼の筒状深鉢で、隅面取りを行った底部からL字状に体部を立ち上げ、口縁部は丸くおさめている。外面には塗り土が認められる。17と18は灯明皿であり、17は備前焼で内面に突帯を有する。

写真3　発掘調査の様子

写真4　発掘調査の様子（Aトレンチ）

# 第4章　まとめ

今回の発掘調査は個人の宅地開発事業に先立つ調査であり、事業主の方の格別のご理解とご協力にまず深くお礼申しあげたい。個人の宅地開発という事業の性格上あるいはその緊急性から、発掘調査の期間・費用等といった制約は不可避であり、調査は必ずしも十分な体制ではなかったため調査方法等に意を尽くせなかった部分も多い。しかしながら、周世・入相遺跡の広がりをより具体的に把握することができただけでなく、いくつかの遺構を検出し、弥生集落の一端を明らかにすることができた。

以下調査成果を再度整理してまとめとする。

### 1. 各遺構の時期

検出遺構としては、弥生時代の土坑・溝などがあるほか、掘立柱建物2棟を検出した。各遺構の時期は、その出土遺物から判断して、土坑2を中期後半、土坑1・溝4などは概ね弥生時代後期前半のものと考えられる。掘立柱建物については、柱穴出土遺物が皆無であること、そして過去の調査[12]において今回の調査地の周辺から弥生時代以降近世までの掘立柱建物が多数検出されていることから、その時期決定は保留せざるを得ない。しかしながら1間×1間という建物規模に着目すれば、この種の構造は弥生時代に多くの類例を見出せるし、また付近からは弥生時代以外の遺構や遺物はほとんど出土していない状況から、弥生時代の遺構である可能性が高いことを指摘するにとどめたい。

### 2. 周世・入相遺跡と千種川下流域の弥生遺跡

赤穂市域における弥生時代遺跡の密集地は北部の有年地区が著名で、事実その質・量ともに他の地区を圧倒しており、当時の有力な地域集団を形成していたことを否定する余地はない。この有年地区以南の千種川下流域においては、周世・入相遺跡のように比較的古くからその存在が明らかであった遺跡も存在するものの、千種川の現氾濫原の広さも相まって、あまり遺跡の存在しない地区と把握しがちであった。しかし第2章で紹介したように、近年の発掘調査はこの千種川下流域の遺跡分布に多くの新たな知見をもたらしている。以下、周世・入相遺跡を中心に周辺遺跡の状況も加味して、弥生時代における千種川下流域の集落の展開を概観しておく。

まず今回の調査地の周世・入相遺跡であるが、過去の調査において弥生時代中期から江戸時代にわたって自然堤防上に集落が形成されたことが明らかにされている。弥生時代では、集落の最初の形成期にあたる中期中葉の遺構も存在するが、集落規模が拡大するのはむしろ後期以降である。また後期の比較的古い段階からその終末期まで、集落が継続していることにも注目したい。

この周世・入相遺跡と千種川を挟んで対岸には高雄・根木遺跡[13]が存在する。この地区は通称切山が西の山塊から千種川の流路に厳入してその侵食を遮り、下流側に自然堤防あるいは後背湿地が形成されている。高雄・根木遺跡では、調査範囲が狭いこともあって主な遺構は弥生時代後期の竪穴住居1棟が検出されたに過ぎないが、住居跡床面に完形土器が比較的まとまって残されており、後期前半の良好な一括資料を提供した。

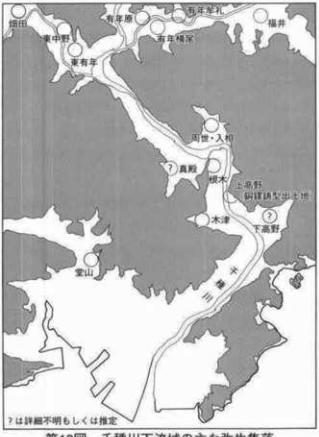
やや下流に目を向ければ、西岸に木津・段ノ上遺跡[14]が存在し、ここでも集落の形成は中期後半から開始され後期まで集落が継続していることが明らかになっている。加えて中期・後期ともに比較的高い密

度で竪穴住居等の遺構が存在することから、かなりの規模の集落の存在を推定することが可能である。

木津・段ノ上遺跡の対岸には、かつて銅鐸鋳型片が採集された高野地区があるが、今のところ明確な弥生時代の遺跡は知られない。しかし周世地区や木津地区と似た地形や、周辺の山麓に展開する高取山古墳群をはじめとする広範な後期古墳の築造状況などを勘案すれば、やはり千種川の侵食を免れた部分を中心に弥生・古墳時代の集落が存在する可能性は極めて高いものと思われる。

また周世地区の対岸やや上流に位置する真殿地区では、現在のところ弥生遺跡は未確認であるものの、その地形環境や山麓に点在する後期古墳の存在を考慮すれば、未発見の遺跡が存在する可能性はやはり否定できないであろう。

以上のように、千種川下流域には近年の発掘調査の進展から予想以上に弥生集落が展開していることが明らかになりつつある。これらの遺跡群の共通する特徴として、いずれの遺跡も千種川の侵食を被らなかった部分に立地すること、中期後半頃に集落形成が開始され後期へ存続することなどが指摘できる。しかしながら、有年地区の中核的な集落である東有年・沖田遺跡や有年原・田中遺跡などの遺跡と比較すれば、いずれも一見小規模集落という印象を受けることは否めない。しかしながら現状での遺跡の分布なり遺跡規模はまさに遺跡として残されたものであって、すでに失われた部分もかなりあるはずである。通常の農耕集落であれば、居住区の周囲に水田域が広がっていたであろうし、墓域の存在も想定できる。ところが実際の遺跡では、これらの集落を構成する要素の一部がかろうじて残存しているに過ぎず、現在小規模な遺跡のように見えたとしても、それは河川の侵食や後世の土地開発によって削平された結果であって、本来は大規模集落であった可能性は常に存在する。しかし実際はともすれば現在の自然景観や遺跡の遺存状況、調査実施状況といった現状に拘泥され、こうした地域の歴史的な意義を過小に評価しがちである。現状の遺跡分布を分析対象とせざるを得ない集落分布論の限界がここにある。



第13図　千種川下流域の主な弥生集落

上高野遺跡を例にとれば、この遺跡では第2章でも紹介したように銅鐸鋳型が採集されており、これを松岡秀夫が推定したように上流から二次移動したものでないとしたら、上高野付近にかつて弥生集落が存在したことになる。上高野遺跡における過去の調査では、わずか一部分で中世の遺構が検出されているものの、弥生時代遺構はついに確認されなかった。現在の水田下には旧河道や洪水に起因する砂礫層が広い範囲にわたって確認でき、この地が頻繁に千種川の侵食を被ってきたことが分かる。未発見の弥生集落は現在の上高野集落と同じように山麓に立地しているか、幾度となくこの地を襲った

洪水によりすでに侵食されたと考えるのが自然であろう。

それでは千種川下流域の東西両岸に点在するこれらの諸集落は相互にあるいは北部の有年地区の諸集落といかなる関係にあったのであろうか。

これら流域の諸集落は背後に開析谷を抱え、前面は千種川によって画されているという地形的に共通した立地条件にあり、いずれもそれぞれが地形的には独立した空間に占地しているといってよい。こうした土地条件のもとでは、丘陵あるいは微高地が連綿と連続するような規模の大きな平野部とは異なり、土地自体には拠点的な大規模集落が形成されるほどの潜在力は存在しないであろう。しかし逆にそこに占地した集団にとっては、地形的な独立性によって小規模ながらも集落・可耕地の拡大をほとんど排他的・自己完結的になし得ることが可能であったことが予想できる。

とはいえ千種川下流域に点在する集落群は、確かに日常的な集落・水田経営においてはある程度独立した存在であったとしても、他方で集落間の物資あるいは人的な交流も頻繁に行われたであろうし、各種資源・原材の獲得や政治的折衝といった対外集団・他地域との交渉においては、相互に全く自立した存在であるとは考えにくく、むしろ中核的な集落あるいは首長の主導や各首長の協同によってはじめて実現可能なものであったはずである。さらにこのようにある一定の空間的な広がりをもって展開する弥生時代の集落群は、水利・大規模協業によって不断に結びついたひとつの共同体的関係を有していたと考える[7]のが一般的で、それは「農業共同体的結合[8]」としての性格を持つものであったと思われる。

このように考えるなら、周世・入相遺跡を含めて千種川下流域に点在した集落群は、個別の集落経営を行いながらも、相互に有機的な紐帯をもったひとつあるいは複数の政治的な集団であり、その狭隘な土地条件から分散居住の形態をとったものと理解することができる。

しかし注目すべきは、上流の有年地区の集団と比較すれば、千種川下流域の集団は土地条件の相対的な劣性にもかかわらず対外交流の側面において、むしろ重要な位置を占めていた可能性があることである。周世・入相遺跡では過去に河内地方からの搬入品である壺の出土や、製塩土器の出土が知られている[9]。また今もって集落跡は検出されていないものの、上高野出土の銅鐸鋳型は、この集団が銅鐸鋳造に何らかの形で関与していた可能性が高いことを示唆するものである。これら銅鐸関連や他地域系の出土遺物は土地条件から想定される後進的な印象を払拭するのに十分な内容であり、むしろ千種川の河口に近いという地理的な特徴が他地域との交流において重要な位置を占めていたことを窺わせる。

弥生時代は列島規模で多様な物流ルートが確立され始めた時代である。いかなる集団も各自の領域内で必要物資を確保することは不可能であるから、集団間に張り巡らされた物流ルートを通じて各種資源や原材を獲得したことは、各種遺物の分析から広く確認されている。こうした物流ルートの制御あるいは物資の離合集散には拠点集落が重要な役割を担っていたことが指摘されており[10]、拠点集落を通じて分岐小集落へ物資がもたらされたと考えられる。

こうした弥生時代の物流ルートには集落間をつなぐ陸上の経路と、瀬戸内海や大河川の水運による水上の経路が想定される。そしてこうした物流ルートの結節点に拠点集落が分布しており、それはしばしば河川の河口付近や海岸線、主要交通路の要衝に位置していることが指摘されている[11]。こうした臨海平野部に立地した拠点集落を介して内陸部へ物資が拡散したことは明らかである。今回取り上げた千種川下流域は、当時すでに交通路として重要な役割を果たしていた瀬戸内海に開けているばかりか、この水上の経路と有年地区あるいはさらに上流の上郡盆地などの内陸部を結ぶ重要な結節点であった。というのも弥生時代における千種川の河口デルタ地帯は集落の形成可能な土地が未発達もしくは、不安定な地

形環境にあったため[10]、播磨の他地域の河口付近にしばしば見られるような拠点集落が成立しにくい状況であったと思われる。よって物流の水上の経路と内陸部の結節点はこうした千種川下流域の諸集落に求められたことは想像に難くない。しかし現時点での知見では、千種川下流域に分散する諸集団が政治的な独立性をある程度有した一個の集団として機能したのか、あるいは上流に位置する東有年・沖田遺跡や有年原・田中遺跡などを中核とするような、大規模な上位集団が制御する物流システムの一端を分掌した集団であるのかは速断できない。いずれにしても周世・入相遺跡の過去の調査において出土した製塩土器や河内地方からの搬入土器、また上高野遺跡採集の銅鐸鋳型など、一見小規模な遺跡でありながらも他地域系の遺物の出土が意外と目立っている。特に銅鐸鋳型などは特殊な技術集団の関与する極めて政治性の強いものである。いずれにしても対外交流の物流ネットワークにおいて、この千種川下流域の集団が重要な役割の一端を受け持っていたことを傍証するものであろう。

さらにこの千種川下流域の弥生集落において指摘できる今一つの特徴をあげれば、すでに指摘したように、集落の形成が弥生時代中期後半頃に開始され、後期にまで集落が継続するものが多いことである。今回の周世・入相遺跡ではむしろ後期にいたって集落が大規模に展開した状況が窺えるし、本津・段ノ上遺跡においても同様の傾向が指摘できそうである。やや上流の有年地区においても様相は変わらない。近年、西播磨の弥生時代遺跡の消長を分析した結果から、遺跡が中期から後期へと継続しないことが指摘され、そこに大規模な抗争を伴った政治的な集団の再編成が存在したことが想定されている[11]。しかし、こと千種川流域においては、そのことは必ずしも当てはまらないようである。このことが歴史的事実として一考に値する現象なのか、もしくは調査の諸条件や遺跡の残存度など他の要因に起因する現象なのか、他地域を含め今後の調査の進展に期待したい。

注

(1) 宮崎素一編『周世入相遺跡発掘調査報告書』赤穂市教育委員会　1984年、宮崎素一編『周世入相遺跡確認調査報告書Ⅱ』赤穂市教育委員会　1986年、宮崎素一編『周世入相遺跡確認調査報告書Ⅲ』赤穂市教育委員会　1988年、甲斐昭光編『赤穂市周世入相遺跡』兵庫県教育委員会　1990年

(2) 1992年度にほ場整備事業及び高雄公民館建設に伴い赤穂市教育委員会が発掘調査を実施。

(3) 1995・1996年度にほ場整備事業に伴い赤穂市教育委員会が発掘調査を実施。

(4) 松岡秀夫　a「考古学から見た赤穂」『赤穂市史』第一巻　赤穂市　1981年、b「赤穂市の考古遺跡と遺物」『赤穂市史』第四巻　赤穂市　1984年、c「赤穂市上高野発見の銅鐸溶笵」『考古学研究』第23巻第2号　1976年

(5) 1996年度にほ場整備事業に伴い赤穂市教育委員会が発掘調査

(6) 近藤義郎「単位集団と集合体」『前方後円墳の時代』岩波書店　1983年

(7) 都出比呂志「集落の構造」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店　1989年

(8) 甲斐昭光編注（1）文献

(9) 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第3集　奈良大学　1984年、都出比呂志「地域圏と交易圏」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店　1989年

(10) 酒井龍一注（9）文献

(11) 高橋　学「播磨灘沿岸平野の地形環境と土地開発」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会　1990年

(12) 岸本道昭「断絶の中期と後期－西播磨弥生社会の理解のために－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3　設立10周年記念論集』（財）大阪府埋蔵文化財協会　1995年、岸本道昭「弥生集落と地域史的位置」古本寛編『尾崎遺跡Ⅱ』龍野市教育委員会　1995年

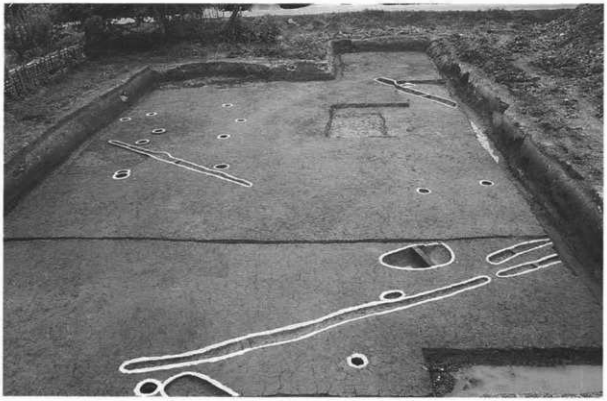
# 写　真　図　版


| | | | |
|---|---|---|---|
| 写真図版 | 1 | | 遺跡周辺の地形（国土地理院撮影） |
| 写真図版 | 2 | 上 | 周世・入相遺跡の遠景 |
| | | 下 | 調査前の状況 |
| 写真図版 | 3 | 上 | 調査区全景（南東から） |
| | | 下 | 調査区全景（北西から） |
| 写真図版 | 4 | 上 | 土坑１（北から） |
| | | 下 | 土坑２（西から） |
| 写真図版 | 5 | 上 | 溝１・２（南から） |
| | | 下 | 溝４（西から） |
| 写真図版 | 6 | | 掘立柱建物１・２ |
| | | | Ａトレンチ（南から） |
| | | | Ｂトレンチ（東から） |
| 写真図版 | 7 | | 土坑１出土土器 |
| | | | 土坑２出土土器 |
| | | | 溝４出土土器 |
| | | | 包含層出土土器 |
| 写真図版 | 8 | 上 | 包含層出土土器 |
| | | 下 | 包含層出土土器 |

遺跡周辺の地形（国土地理院撮影）

周世・入相遺跡の遠景

調査前の状況



調査区全景（南東から）

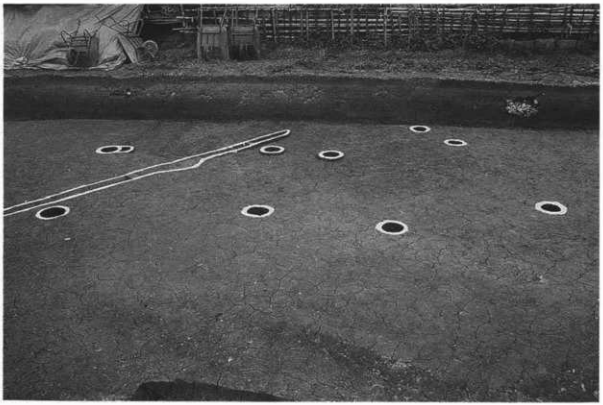
調査区全景（北西から）

土坑1（北から）

土坑2（西から）

溝1・2（南から）

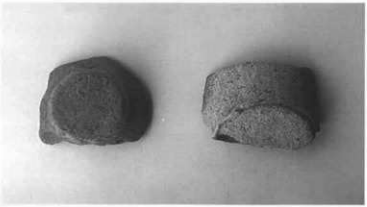
溝4（西から）



掘立柱建物1・2

Aトレンチ（南から）

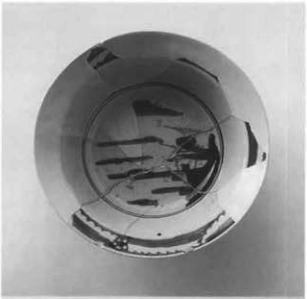
Bトレンチ（東から）



土坑 1 出土土器

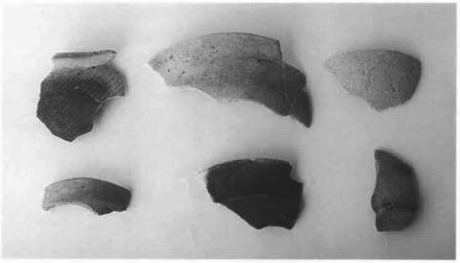
土坑 2 出土土器

溝 4 出土土器



包含層出土土器

包含層出土土器



包含層出土土器

包含層出土土器

| | |
|---|---|
| ふりがな | すせ・いりやいせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 周世・入相遺跡発掘調査報告書Ⅳ |
| 副書名 | ―宅地開発事業に伴う発掘調査― |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 赤穂市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 46 |
| 編著者名 | 中田宗伯 |
| 編集機関 | 赤穂市教育委員会　生涯学習課 |
| 所在地 | 〒678－0292　兵庫県赤穂市加里屋81番地　TEL 07914－3－6858 |
| 発行年月日 | 西暦1998年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| すせ いりやいせき<br>周世・入相遺跡 | ひょうごけんあこうし<br>兵庫県赤穂市<br>すせ<br>周世 | 28212 | | 34°<br>48′<br>00″ | 134°<br>24′<br>40″ | 19910521<br>～<br>19910612 | 302 | 宅地開発 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 周世・入相遺跡 | 集落跡 | 弥生時代 | 土坑<br>溝<br>掘立柱建物 | 弥生土器<br>近世陶磁器 | |

赤穂市文化財調査報告書46

周世・入相遺跡発掘調査報告書Ⅳ

—宅地開発事業に伴う発掘調査—

1998年3月31日　発行

編集・発行　赤穂市教育委員会　生涯学習課
〒678-0292　兵庫県赤穂市加里屋81番地
℡07914-3-6858

印　　刷　セイコー印刷

本データは全国遺跡報告総覧において公開するため、
赤穂市教育委員会文化財課文化財係が編集・作成したものです。

データ編集・作成　赤穂市教育委員会　文化財課　文化財係
〒678-0292　兵庫県赤穂市加里屋 81 番地
TEL：0791-43-6962　FAX：0791-43-6895

令和2年（2020 年）４月１日　データ編集・作成